

〔書評と紹介〕

北東北古代集落遺跡研究会編

『9～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』

関根 達人

本書は、北東北古代集落遺跡研究会が二〇一〇～一四年度にかけて北東北三県（青森・秋田・岩手）を対象に行った、平安時代の土器編年と竪穴建物跡の集成に基づく研究成果をまとめた報告書である。

研究会の代表である船木義勝氏の巻頭言を借りるなら、本研究プロジェクトは「平安時代の国勢調査」であり、報告書の前半には、北東北三県の一四名の担当者が一六四二軒もの竪穴建物跡を「戸別訪問」した基礎的集成が収められている。本報告書の後半では、竪穴建物跡の基礎的集成を基に、研究プロジェクトの考察という形で、古代北東北を語る上で避けて通ることのできない元慶の乱や十和田・白頭山の二つの火山噴火について、船木氏が考察を行っている。

本書の構成と執筆担当者は次の通りである。

第1章 はじめに

- 1 研究の目的（船木義勝）
- 2 研究の経過（船木義勝）
- 3 研究の方法（八木義則・五十嵐祐介）

第2章 9～11世紀の土器編年構築と竪穴建物跡の集成からみた、北東

北の特質

- 1 津軽地区（斎藤淳・木村淳一）
- 2 鹿角・北秋田・能代地区（宇田川浩一・嶋影壮憲）
- 3 秋田・八郎潟沿岸地区（伊藤武士・五十嵐祐介）
- 4 仙北・平鹿・雄勝地区（高橋学）
- 5 下北・上北・三八地区（宇部則保・大野亨・加藤隆則）
- 6 二戸・九戸・閉伊地区（田中美穂）
- 7 岩手・紫波地区（八木光則・福島正和）
- 8 稗貫・和賀地区（村田淳）
- 9 胆沢・江刺・磐井地区（八木光則）

第3章 総括（船木義勝）

- 1 竪穴建物跡の集成からみた、古代北東北の世界（1）
- 2 10世紀の巨大火山噴火と気候変動
- 3 竪穴建物跡の集成からみた、古代北東北の世界（2）

第1章1の研究の目的では、古代の北東北は文献資料が極めて乏しく考古資料に依拠しなければ歴史が描けないにも関わらず、土器の編年が確立されていないため、古代集落の動態が把握できていないと問題点を指摘する。その上で、問題解決には「(地域別) 広域編年指標器種編年図」とそうした土器の年代観に基づく「北東北竪穴建物跡集成」が必要であるとの認識が示されている。2の研究の経過によれば、本研究プロジェクトは、二〇一〇年三月から二〇一一年三月までの一年間を準備段階とし、その間、秋田市・五所川原市・能代市・盛岡市で計四回の研究会が開かれている。明治大学大久保忠和考古学振興基金の奨励研究に採

扱された二〇一一年度からは正式に北東北古代集落遺跡研究会を発足させ、二〇一三年度までの三年間に、大館市・八戸市・鹿角市・盛岡市・北秋田市・青森市で計六回の研究会が開かれた。

第1章3の研究の方法によれば、土器編年の対象時期は九〜一世紀で、須恵器長頸壺・広口壺、高台付土器(皿・坏・埴・内外黒色を含まず)、内外黒色土器(坏・高台付坏類・外面ミガキだけのものを含む)、耳皿、小皿(小形坏を含む)、以上の五器種を編年の指標としている。時期は九世紀前葉(1期)から一世紀(8期)まで、地域は、津軽、鹿角・北秋田・能代、秋田・八郎潟沿岸、仙北・平鹿・雄勝、下北・上北・三八、二戸・九戸・閉伊、岩手・紫波、稗貫・和賀、胆沢・江刺・磐井の九地区に区分されている。竪穴建物跡については、「形態及び構造」・「付属施設」・「カマド」・「火山灰」・「出土遺物」の五大項目を設定し、共通の書式に則り集成がなされた。

第2章では、地区ごとに「概要」・「土器編年」・「竪穴建物跡の集成」・「まとめ」の順で記述が行われている。第2章には、本報告書の八割を超す二七五頁が割かれている。本集成は、本研究プロジェクトに関わった研究者の努力の賜物であり、北東北の古代史を語る上で欠かせない「字引」の役割を果たしてくれる。

第3章1の「竪穴建物跡の集成からみた、古代北東北の世界(1)」では、集落数・竪穴建物跡数から人口変動の動態を導き、それが政治的・社会的要因によるものなのか、自然災害などの環境の変化によるものなのか、これまでの学説を振り返るとともに、検討が加えられている。すなわち、各期の時間幅を、十和田a火山灰・白頭山火山灰の降下年代

を考慮して、2期Ⅱ三三年間(八三三〜八六六年)、3期Ⅱ三四年間(八六六〜九〇〇年)、4期Ⅱ二五年間(八九〇〜九一五年)、5期Ⅱ二四年間(九一五〜九三九年)、6期Ⅱ二七年間(九三九〜九六六年)、7期Ⅱ三四年間(九六六〜一〇〇〇年)と設定した上で、竪穴建物一軒につき居住人数を三人と仮定し、竪穴建物の増減・建物増加率・人口換算値・年平均人口増加率で地域間を比較している。

元慶の乱による出羽国民の「奥地」逃亡については、乱の発生した八七八年が前述の時期区分では3期に含まれ、乱の前後での変化が捉えにくいこともあり、「今後あらゆる角度から再検討する必要がある」として残念ながら考古学的評価は示されていない。一方、東北半部に関する、5期の北津軽、鹿角・北秋田・能代、二戸・九戸・閉伊における竪穴建物増加率の急上昇は十和田火山噴火、6期の竪穴建物増加率の減少は白頭山火山噴火の影響が考えられるとされた。

第3章2の「10世紀の巨大火山噴火と気候変動」では、前節を受けて、一〇世紀前半に北東北を襲った十和田火山と白頭山火山の噴火について、火山噴火と気候変動との関係性が把握できている一八八三年に起きたインドネシアのクラタカウ火山の噴火との比較を試みている。硫酸イオン濃度・火山爆發度指数・総噴出量で比較すると、噴火規模は白頭山、クラカタウ山、十和田山の順であり、白頭山の噴火が北半球に与えた影響は、クラカタウ火山による影響、即ち噴火後一年半後の気温低下レベルはマイナス一〜二度以上であったとする。次に当該期の日本と中国の主要文献史料にある異常気象や気候変動に関する記事から気温の低下を、祈雨・請雨に関する史料からは降水量の減少を指摘し、白頭山噴火に伴

うそうした環境変動の影響最大期は噴火直後（九三八・九三九）から九四二年頃であり、九四六〜九五一年頃までは噴火による気候への影響が及んでいたとする。さらに『古今著聞集』にある「天慶三年一二月、出雲国黒島俄に消失の事」と「天慶四年正月、出雲国島根・楯縫両郡の境に氷塔出現の事」を根拠に、島根半島への流水の漂着を想定し、そこから九四一年一・二月の出雲国秋鹿郡黒島周辺の平均気温は平年値より一〇・一度ほど低くマイナス六・八度前後であったと推定する。また、当該期に気候が寒冷化した証拠として、白頭山―苫小牧火山灰層の直上に堆積する新期クロスナ層や黒色土層、辻誠一郎氏や水野章二氏による花粉分析から導きだされた針葉樹の増加を挙げる。

第3章の「竪穴建物跡の集成からみた、古代北東北の世界（2）」では、歴史人口学や人類生態学の成果を援用し、古代・近世・近現代の人口増加率と比較することにより、古代北東北の人口増加率の相対的評価が試みられている。前近代の日本社会では年平均人口増加率は一パーセント未満なのに対し、四パーセントを越す3期の北東北の人口増加率は、明言されていないものの、貞観地震・津波や元慶の乱に起因する東北中部から北東北への住民の移住と関連付けて考えているようである。5期の北東北の人口増加率は、北半部が二・七パーセントに対して南半部はマイナス〇・一六パーセントであり、十和田山噴火の影響が指摘されている。続く6期には人口増加率は北東北全体でマイナス二・三五、建物増加率はマイナス四五・五パーセントに落ち込んでおり、白頭山噴火による環境悪化が原因と見られている。船木氏は、「環境変動の長期化は新しい現実的な生活を維持するための選択が行われ、次第に豊かな

富を蓄積した在地社会の有力者と交易者、あるいは事実上の武の力（暴力？）を所持する者などによる新しい関係が構築され、再編成された地域的ネットワーク社会（社会集団）が作り出されていた可能性もありうるのではなからうか」と述べ、九世紀前半に起きた十和田・白頭山の噴火による気候変動が遠因となつて、北東北の社会が変質し、「防御性（区画・囲郭）集落」の形成に繋がることを示唆し、本報告書を結んでいる。

以上、第3章の総括で示されている考察に対しては賛否があるが、前述の通り、第2章の集成に関しては本報告書を手取る者全員が感動し、畏敬の念すら抱くに違いない。しかしながら集成に関し、気になった点もいくつかある。第一に、基本的な分析項目は、大枠では北東北九地区全体で共通しているものの、個別具体的な分析は地域毎に異なっているため、全項目に関して同じ「物差し」で比較できるわけではない（例えば、鹿角・北秋田・能代地区では時期ごとに焼失建物数が検討されており、表で数値が示されているが、津軽では焼失建物跡に関する図表はなく、文章中にも言及が見られない）。第二に同じ分析が行われている場合でも、地区ごとに図表のフォーマットが統一されていないため、比較しにくい（例えば、津軽では竪穴建物のカマドの方向が時期ごとに集計表とリーダーチャートで示されているが、鹿角・北秋田・能代地区では簡単な記述のみで図表は見当たらない）。第三に、地区ごとに記述されているため、同じ項目を比較しようとした場合、頁がかけ離れ、比較しにくい（この点は、「竪穴建物跡数の推移」についてのみ、第3章総括のなかで地区間の比較が見やすく図示されている）。本報告書を読

み、評者のように、こうした不便さを感じた人は、本報告書の付編であるCD-Rを是非開いていただきたい。CD-Rには、遺跡ごとの竪穴建物跡軒数表と竪穴建物跡集成がエクセルのデータとして収められている。竪穴建物跡集成データには、一六四二軒の全てについて、時期、形態及び構造（形態・長軸規模・短軸規模・深さ・主軸方向・柱構造・壁溝・貯蔵穴・張出し・炉）、カマド（構築材・位置・構築方法・煙道・煙道傾き・煙出しピット）、火山灰堆積、出土遺物、文献が書き込まれており、その気になれば、誰でも本報告書の内容を検証し、異なる視点から新たに分析を行うことが可能である。付編には全ての考古学研究者に「新たな北東北地域史像構築の土台」を提供するという崇高な志が込められている。

本報告書全体を通してみた場合、やや物足りなく感じられるのが土器と対象地域の問題である。第2章の集成のなかで地域ごとに土器の変遷が明確になっているにも関わらず、第3章の総括では、土器には竪穴建物跡を時期ごとに振り分ける「時間のモノサシ」の役割しか与えられず、土器から生活様式の変化や地域間交流の在り方を読み解くという視点が十分活かされていない。もし、そうした視点から検討が行われていたのなら、第3章の総括は、古代北東北の動態をより鮮明に描き出せたと思われるだけに残念である。さらに欲を言えば、今回の集成に北海道島南部も入れて欲しかった。本報告書の中でも指摘されている通り、古代の北東北北部の人口動態を論じる場合、郡制が敷かれた北東北南部以南とともに、津軽海峡を介して北側に接する北海道島南部の擦文集団をも視野に入れて検討する必要がある。白頭山の噴火による影響は北東北と北

海道南部とではどちらが大きいのか？津軽海峡を越えた人の移動と、北緯四〇度線を跨いだ南北間での人の移動を比較した場合、その規模や移動の理由にどういった違いが見られるのか？等、素朴な疑問は尽きない。

過去二〇〇〇年間で、一〇世前半に起きた十和田山の噴火は国内最大級、同じく白頭山の噴火は世界最大級の火山噴火とされる。九一五年の十和田山の噴火から一〇〇年後の二〇一五年、岩手県立博物館でテーマ展「火山灰から社会を読む―10世紀の巨大噴火と北東北―」が開催された。岩手県埋蔵文化財センターの親組織にあたる岩手県文化振興事業団創立三〇周年記念事業として行われたこの展示では、火山灰の堆積状態をパターン化し、それと土器を組み合わせることで竪穴建物跡の時期判定をより厳密化している点が印象に残った。我々はとかく過去に起きた社会変化の要因を自然災害やそれによって引き起こされる環境変化に求めがちである。果たしてそのような議論が成立するのか？二〇一一年の東日本大震災以降、日本社会の変化が目立つように思えるが、そのような変化は果たして震災前からすでに生じていたのか？本報告書を読むにつけ、発掘現場に立ち、過去の災害と社会変化との関係を、自らの目で確認したい想いかられた。

なお、本報告書は非売品だが、東北地方の主要な博物館や埋蔵文化財センターなどで閲覧できるほか、北東北古代集落遺跡研究会のホームページからダウンロードすることができる。

(<https://sites.google.com/site/kitohokukodaisyurakuyan-ju-dao-gao-shunodaunodo>)

(A4判、三二八頁、北東北古代集落遺跡研究会、二〇一四年)

(せきね・たつひと 弘前大学人文学部教授)